



夢のぶどう求め続けて

天の恵んでくれた土地

ぶどう作りに最適な気候は日照時間が多く雨が少なく、日照が少ないと品質の向上が困難で、雨が多くなると病気が発生しやすくなります。岡山県はぶどうにとって、天の恵んでくれた土地です。

1989年、幸運にも皮ごと食べられる種無しぶどう「瀬戸ジャイアンツ」の完成にこぎ着けられました。これは食べやすさ、栽培しやすさの面から消費者と生産者が共に長年求めていた品種です。今では岡山県はもちろん、全国各地の農家で増殖が進み、微力ながらぶどう産地の発展に貢献できることに喜びを感じています。

貧しかった少年時代

私は農家に生まれ、早くに父と死別しました。少年期・青年期を過ごした当時は第二次大戦前後で、農家でも食べ物に困った時代です。農地改革で小農になったのに加え、父親の兄弟も終戦後一緒に暮らし始め、貧しい思いをしたため、幼いながらに食べ物の大切さが身に染みていました。そんな経験から農業高校を卒業して岡大農学部へ進学し、4年間果樹の研究室に在籍。農業一筋の道を歩む素地ができたわけです。卒業後は1年間の農業試験場果樹分場での研修を経て、高校の農業科教師になりました。

卒業生
その人に聞く

花澤 HANAZAWA Shigeru 茂

ぶどう研究家 × 岡山大学農学部卒

皮ごと食べられる種無し高級ぶどう「瀬戸ジャイアンツ」を完成させた。県立高校の農業科教諭を早期退職し、「花澤ぶどう研究所」を設立。瀬戸ジャイアンツのほかにもハイベリー、マスカットデュークアモーレなど7品種を確立。80歳を迎えてなお、ぶどう研究に意欲を燃やす。



瀬戸ジャイアンツ▶

- はなざわ しげる (80歳)
- ▶1932(昭和7)年 岡山県和気郡和気町出身
 - ▶1955(昭和30)年 岡山大学農学部卒
 - ▶1955(昭和30)年 岡山県立農業試験場(現:岡山県農林水産総合センター農業研究所)果樹分場で研修
 - ▶1956(昭和31)年 岡山県立高校農業科教諭
 - ▶1967(昭和42)年 農地取得、ぶどうの試作開始
 - ▶1989(平成元)年 岡山県立高校教諭退職
「瀬戸ジャイアンツ」品種登録
花澤ぶどう研究所設立
花澤ぶどう研究所顧問
 - ▶2013(平成25)年

ぶどう研究の道を志したのは、1960年頃にデラウェアや巨峰といったぶどうが市場に流通するようになったことがきっかけです。甘みの強さに加えデラウェアは種無しで食べやすく、巨峰は粒が大きく食べ応えがあり見た目が良いなどの理由で、急速に人気が高まりました。岡山県はぶどうの一大産地でしたが、当時の主力品種キャンベルが次第に押され気味に。教員をしながらも「キャンベルに代わる新たな品種が必要なのは」と感じ、様々な品種の情報を集めるようになりました。しかし納得できる品種は見つからず、「自分で研究し生み出すしかない」と痛感。現在の土地で新品種育成(育種)を始めたのです。

売れる品種作る努力

海外品種も集めるなど、がむしゃらに品種探しを行っていたとき、栽培仲間から日本の気候風土に適した品種を育種するようアドバイスを受けたのが決め手となり、ついに瀬戸ジャイアンツの交配(クザルカラ×ネオマスカット)にたどり着きました。日本に合いそうな品種のみに絞る、有利と考えられる多数の交配を行った結果でした。

現在流通しているぶどうは、長い年月の間に消費者ニーズなどに合わせ精選された系統です。た

だ、人気品種がいつまでも売れ続けるとは限りません。私は「従来品種を売る努力」より「売れる品種をつくる努力」が重要であるという信念を持ち、ぶどう作りを取り組んでいます。意外と思われるかもしれませんが、当初は瀬戸ジャイアンツも実が桃のような形をしている見た目の問題などから市場で相手にされませんでした。しかし今では、おいしいユニークな高級ぶどうとしての地位を確立しています。

さらなるぶどうの開発を

瀬戸ジャイアンツの品種登録とともに設立した花澤ぶどう研究所は、今年から息子に代表を譲り、私は育種をはじめ、農家の方への栽培指導や後継者養成に力を入れています。おいしいぶどうを作ることは農家にとって喜びとなり、私にとっても市場への供給体制が整う良さがあります。今は本音を語り合える仲間と一緒にスクラムを組んでやっています。交配時には予期しなかった、神の恵み。ともいうべき瀬戸ジャイアンツ。今後はそれにも負けない多くのぶどうを開発したいと思っています。日本の農業のノウハウや技術、農産物の品質は非常に優れています。研究の手を休めず、日本国内はもちろん世界の生食ぶどうの消費を広げられるようリードしていきたいです。